

# 上接動詞の類型とテアリ文の意味

神 永 正 史

キーワード：テアリ文、タリ文、限界性、動作主体、動作客体

## 要 旨

アスペクト（＝相）の助動詞「たり」は動詞連用形に接続する助詞「て」に動詞「あり」がついた「てあり」を原型とする。「てあり」と「たり」はこのような語形成上の関係にあるものの、例えば、平安中期の「たり」（以下タリと表記する）と「てあり」（以下テアリと表記する）とでは、同じくアスペクトを表すにしても両者のもつ意味・機能には少なからず異なりが見られる。このタリとテアリの異なりは、タリが助動詞として機能する一語のものであるのに対し、テアリがテと存在動詞を源とする「あり」（以下存在の本動詞「あり」と区別してアリと表記する）の2つの部分が複合化されたものである、という形態上の違いから生じている。

テアリは上接動詞が動作を示すものか、変化を示すものか、目的語をとるか、とらないかなどにより意味・機能に異なりが生ずる。更に、目的語をとる動詞の限界性の有無によって、テアリの述べる対象が動作主体か動作客体かのどちらかに分かれる。また、動作客体について述べる文も、その文中の動作主体の扱いについては一様ではない。このようなテアリ文をテアリに上接する動詞の意味特性によって分類し、分類されたテアリ文の意味・機能を明らかにし、同時にそれらテアリ文の意味・機能とタリ文のそれとを比較して示そうとするのが本論の趣旨である。

## 1. 動詞の類型

すでに述べたようにテアリは上接動詞が動作を示すものか、変化を示すものか、目的語をとるか、とらないかなどにより意味・機能に異なりが生ずるが、更に目的語をとる動詞は、とらない動詞と異なり、限界性の有無によって、意味的な異なり

が生ずる<sup>\*1</sup>。このようなテアリ文の相互の異なりを明確化するため、以下のように動詞を分類する。

まず、目的語をとるかとらないかを区別するため自動詞と他動詞に分ける。自動詞は動作を示すもの（これを□とする。以下同じ）と変化を示すものに分ける。変化を示す自動詞を、動作による変化か、状態の変化という観点から、主語にあたる有情物の動作による動作主体の変化を示すもの（②）と、主語にあたる有情、非情物の状態の変化を示すもの（③）に分ける。次に、他動詞であるが、テアリ文は上接する他動詞の限界性の有無によって意味内容が異なるので<sup>\*2</sup>、限界性のないもの（④）と、限界性のあるもの（⑤）に分ける。

図示すると以下のようになる。

図1 動詞の類型

自動詞	}	動作を示すもの		①	
		変化を示すもの	}	主語の動作による変化	②
					主語の状態の変化
他動詞	}	限界性のないもの		④	
		限界性のあるもの		⑤	

以下①～⑤の順に検討していく。

資料として平安中期仮名散文の源氏物語（作り物語）、枕草子（随筆）、栄花物語（歴史物語）を取りあげた。これら3作品の本文・校訂については『新編日本古典文学全集』（小学館）に依拠し、解釈・現代語訳については前書ならびに『日本古典文学大系』及び『新日本古典文学大系』（岩波書店）を主に参考にした。

3作品に現れたテアリ文の106例中、動詞+敬語補助動詞（「睦びきこゆ」「語らひきこゆ」「見なしたてまつる」「頼みたてまつる」「覚えたてまつる」）、および動詞+助動詞（「あしうせらる」「なさす」「思はす」「知らす」）にテアリが下接する

\*1 この異なりとは、4. 2. 1で述べる状態表示対象の違いを指す。

\*2 限界性の有無による動詞分類は、工藤1995を参考にした。

9例は意味の不明確化を避けるため扱わないので、本稿で扱う例文は97例となる\*3。

論者は神永 2006 で平安中期のテアリ文の意味からテアリはタリのような一語の助動詞ではなく、接続助詞テと存在動詞「あり」に由来にする「アリ」から構成されていると目されることを述べた。このアリは存在を表す本動詞「あり」のように、それ自身で述語となったり、独自の主語や存在場所を示す項をとったりするものではないが、いまだ意味的に存在の本動詞「あり」の影響を残しており、そのため助動詞の接続などでテアリのアリがテから独立した要素のような振る舞いもみせる。本論の展開において、このようなテアリのアリの特徴がテアリ文の意味・機能の面に十分に顕れていることを示していく。

以下、上記のように分類された動詞毎にテアリ文をみていく\*4。

## 2. 動作を示す自動詞+テアリ（類型①にあたるもの）

まず、動作を示す自動詞（計13例）について述べる。

自動詞のうち意志的動作を示すものには「おこなふ」、非情物である建築物を主語にした「廻る」（2例）「あたる」「（北）かく（掛く）」がある。さらに、無意識的動作を示す「笑ふ」「慰む」があり、また心的動きを示すものとして「心つく」「心をやる」「卑下する」がある。その他に状態性の強い「ながらふ」「生く」「あま（余）る」がある。各々のグループの例文を示す。各グループの「～テアリ」の表す意味は内容的に例文の示すものと同じである（以下同じ提示の仕方で行う）。

- (1) 惟成入道は、聖よりもけにめでたくおこなひてあり。花山院は御受戒、この冬とぞ思しめしける。  
(栄 巻2)  
(惟成入道は聖よりもまさって格別殊勝に修行している。花山院は御受戒はこの冬とのご意向であった。)
- (2) こなたはただ大きな対二つ、廊どもなむ廻りてありけるに、(源 若菜上)

---

\*3 平安期には「てあり」と同じ構成（テ+存在動詞）の形で「あり」の代わりに「侍り」「おはす」等を用いたものも存在したが、今回はこれらの形式は扱わない。

\*4 平安期のテアリは動詞ばかりでなく形容詞、形容動詞、助動詞の連用形に接続しているが、本稿ではこれらのテアリ形は扱わない。(例文 なほいと高くてあるに、・・(枕 83段))。

（こちらは、ただ大きな対屋が二棟で、いくつもの廊が廻らしてあったのだが）

- (3) 殿上にていみじうなむのたまふと聞くにも、はづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほしたまひてむ」と笑ひてあるに、

（枕 78段）

（殿上の間でわたくしをひどくおっしゃられていると聞くのも、気おくれを感じるけれども、うわさは本当のことならともかくとして、自然に聞いて（誤りも）お直しになるだろうと、笑ってそのままにしていたのだが）

- (4) 年ごろ心つけてあらむを、目の前に思ひ違へんもいとほしう思しめぐらされて、

（源 明石）

（また長年の間執心していたのだらうに、みすみす失望させるのも気の毒なこと、いろいろご思案の末）

- (5) 宮の描きたまへりし絵を、時々見てなけれけり。ながらへてあるまじきことぞと、とごまかうごまかに思ひなせど、

（源 浮舟）

（宮のお描きになった絵を時々とりだして見ては泣いた。（このように）いつまでもつづけていてはならないのだと、あれやこれやと考えあきらめようとするけれども）

(1)の「おこなひてあり」は意志的動作の継続の過程である進行の読みを示す。(2)の「廻りてあり」は建物の設置状態について述べている。(3)の「笑ひてあり」は動作の継続ではなく、「～して、(そのまま) いる」という意味のものである。(4)の「心つけてあり」は「～して、(その心理状態のまま) いる」という意味になる。(5)の「ながらへてあり」は動作を表すが動的 (dynamic) な展開がみられないものである。これらのテアリ文はいずれもテアリのアリの存在により状態性表示が強められ、同種の動詞が下接したタリ文が動作の結果状態および完成を表すのとは微妙に異なっており、特に(1)の継続用法はアスペクチュアリティに関する振る舞いそのものが

タリとは異なっていると考えられる\*5。

### 3. 変化を示す自動詞

源氏物語、枕草子、栄花物語のテアリ文の 106 例のうち、テアリに変化を示す自動詞が上接するものが 52 例あり全用例の約 49 %にあたる。この自動詞は主語である動作主自身の行為による動作主体の変化を表すものと、主語にあたる人・物の状態の変化を表すものとに分けられる。

#### 3.1. 主語の動作による変化を示す自動詞（類型④にあたるもの）

次の自動詞は主語（有情物）にあたる動作主自身の行為による動作主体の変化を示す（計 11 例）\*6。

「うち群る」「つきなむ」「出づ」「離る」（2 例）「仕へまつり」つく」「隠ろう」（2 例）「所う（得）」「並ぶ」「もてなす」\*7

例文を示す。

(6) 殿の御前どもは、側の方に忍びやかにうち群れてあるに、院の御供の人々忍びさせたまへど、いと多くぞさぶらふ。 (栄 巻 13)

(殿の御前駆の者たちは 端の方に人目につかぬように一固まりになって控

---

\*5 タリの継続用法については福沢 1997 に詳しい。タリは本質的に状態性用言であり、その継続用法は「持続」（終わりを含意した時間的に均質な状態）を表し、従来の結果継続（現代語の例で示せば「電灯が点いている」など）、および動作継続（「じっと見ている」など）の 2 つがこれにあたる。テアリの継続用法には、これらの外に、動きのある動作を表す「進行」（現代語の例で示せば「歩いている」など）の読みも加わる。

\*6 動作による変化自動詞も主語が人などではない非情物をとる場合は状態の変化を表すことになる。例を示す。

女は限りありて、見る人少なう、とあることもかかることもあらはならねば、悲しびも隠ろへてなむありける。(・・ので、悲しみも内々のものだった) (源 柏木)

\*7 この「もてなす」は「装う」の意味のものである。(例 ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ、(源 少女))

えているが、院のお供の人々は（院が）目立たぬようにさせていらっしゃるが、じつに多人数である）

同じ動作動詞でも、①の動詞やこの後に述べる④の動詞にみられる動作継続の読みは②の動詞のテアリ文にはみられない。

### 3.2. 主語の状態の変化を示す自動詞（類型③にあたるもの）

次の自動詞は主語にあたる人・物の状態の変化を示す（計 41 例）。

「落ちあぶる」「かわく」「すぐる」（3 例）「萎えかかる」「ふ（古）る」「うちふ（古）る」「うちた（垂）る」「つ（付）く」「もてつ（付）く」「絶ゆ」「装束きたつ」「屈す」「劣る」（2 例）「世づく」「た（長）く」「懸想ぶ」（2 例）「懸想だつ」「気色ばむ」「気色づく」「つくろふ」「人めく」「薄らぐ」「さ（戯）る」「事よ（寄）る」「勝る」（3 例）「違ふ」「起こる」「通ふ」「似る」「浄まはる」「ねづく」「添ふ」「鄙ぶ」「馴る」「仰せごとめく」\*8

例文を示す。

- (7) 「あさましうて失ひはべりぬと思ひたまへし人、世に落ちあぶれてあるやうに、人のまねびはべりしかな。 (源 手習)  
 (嘆かわしくも死なせてしまったと思っておりました女が、この世に落ちあぶれて生きているとか、人が伝えてくれました)

### 3.3. 変化を示す自動詞のまとめ

変化自動詞＋タリが単に過去に起こった変化の発話時での結果状態を表すのに対し、変化自動詞＋テアリはテアリの構成要素であるアリの存在により状態表示が強められ、「変化して、その（結果の）ままある/いる（留まる）」という変化後のある時間（期間）内の持続状態を表す。具体的にいえば、(6)の「うち群れてあり」は「一固まりになって、いる（＝控えている）」という意味であり、(7)の「落ちあ

---

\*8 「すぐる」「違ふ」「似る」等は「～テアリ」で人・物の属性を表すが、ここではその属性を変化の結果状態として扱った。

ぶれてあり」は「落ちぶれて、いる (= 生きている)」という意味である。変化動詞+タリと変化動詞+テアリの意味は、どちらも変化の結果状態を表すというものであるが、細かくみればこのように両者の意味には異なりがある。

#### 4. 他動詞+テアリ

##### 4.1. 限界性のない他動詞+テアリ(類型④にあたるもの)

この種の動詞としては、まず、「言ふ」(3例)「いら(答)ふ」「語らふ」/「言ひかわす」、他に、「思ふ」「思ひやる」「思し疑う」「(宿世・心に)任す」(3例)、および、「す」(サ変動詞)がある(計13例)。各グループの例文を示す(最初のグループは「言ふ」から「語らふ」までを(8)(9)の2例で、「言ひかわす」を(10)の例でと計3例で示す)。

- (8) 笑はせたまひて、「さらば、ただ心にまかせ。われらはよめとも言はじ」とのたまはすれば、「いと心やすくなりはべりぬ。今は歌のこと思ひかけじ」など言ひてあるころ、庚申せさせたまふとて、内の大臣殿、いみじう心まうけせさせたまへり。(枕 95段)  
(中宮様は)お笑いあそばされて、「それならば、ただそなたの心にまかせる。こちらは詠めとは言うまい」と仰せられるので、「とても気楽になりました。もう今は歌のことは気につけないようにしましょう」などと言っているころ、中宮様が庚申をあそばされるというので、内大臣殿は、たいへん気をいれてご用意なされていらっしゃる)
- (9) 「・・・まだ縫ひたまはぬ人になほさせよ」とて、聞かねば、「さ言ひてあらむや」とて、源少納言、中納言の君などいふ人たち、物憂げに取り寄せて縫ひたまひしを見やりてゐたりしこそをかしかりしか。(枕 91段)  
(「・・・まだお縫ひにならない方に直させてください」と言って、聞き入れもしないので、「そんなことを言ってこのままにしておけようか」というわけで、源少納言、中納言の君などという人たちが、億劫そうに取り寄せてお縫ひになっているのを、(命婦の乳母が)遠くから見ていたのがおもしろかった)
- (10) ・・と、言ひ合はせたまひつつ、よう知りたまへり。「とほたあふみの浜柳」と言ひかはしてあるに、若き人々、ただ言ひに、見苦しき事どもな

ど、つくろはず言ふに、 (枕 47 段)

( (頭の弁は) ・ ・ と、わたしと同じように中国の古い言葉をお引きになって、頭の弁の方もわたしが理解していることをよく知っている。頭の弁とわたしは「遠つ近江の浜柳のように (離れてもまた会いましょう)」と言いかわしているのに、若い女房たちは、見苦しいことなどを、齒にきぬを着せずに言い立てるものなので)

- (11) おのづから事ひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかと思し疑ひてなんありける。 (源 桐壺)

(しぜんと事は世間に知れわたって、帝はお漏しにはならないけれども、東宮の祖父大臣などは、これはいったいどういう子細なのかと疑問を抱いておられるのだった)

- (12) 御前に添ひ臥し、御帳のうちをゐ所にして、女房どもを呼び使ひ、局に物を言ひやり、文を取り次がせなどしてあるさま、言ひ尽くすべくもあらず。

(枕 229 段)

( (乳母が) 高貴な方の御前で御子に添ひ臥し、女房たちを呼び使い、自分の局に何か用事を言いに行かせ、手紙を取り次がせなどしているさまは、言いつくせそうにもない)

(8)の「言ひてあり」は意志的動作の継続の過程である進行の読みを表す。(9)の「言ひてあり」は(3)と同じく、動作の継続ではなく、「～して、(そのまま) いる」という意味のものである。(10)の「言ひかはしてあり」は動作パーフェクト(経験)で、文脈から「(すでに) ～してある。(だから今は・・・)」という過去の出来事の現在の効力を表す。(11)の「思し疑ひてあり」は動的(dynamic)でない動作のプロセスを表す。(12)の「～してあり」は幾つかの動作の繰り返しの動きを表す。

これに対して同種の動詞に付いたタリは動作の結果状態および動作の完成を表す。例えば「言ふ」類の動詞にタリの下接した次の例では、「言ひたり」(地の文)「いらへたる」(会話文)は動作の結果状態のいわゆる証拠性を表している\*9。

- (13) 尚侍の君の御返りには、一 中略一 とばかりいささかにて、中納言の君の中にあり。思し嘆くさまなどいみじう言ひたり。 (源 須磨)

\*9 証拠性(結果や痕跡に基づく推量的な表現特性)については鈴木 1996 を参照。



(尚侍の君のご返事は、一 中略一 とぐらいのことを少し書いて、中納言の君からの返書の中に包んである。その手紙には尚侍の君のお嘆きの様子などをたいそう詳しく述べている)

- (14) 「よろしき歌などよみて出だしたらむよりは、かかる事はまさりたりかし。よくいらへたる」 (枕 101 段)  
(「並一通りの歌など詠んで出すのにくらべると、こういうことはずっとすぐれていることだね。うまく応答したことだ」)

また次の例の(15)の「言ひたる」では過去の動作経験(記録)を、(16)の「言ひたれ」では動作の完成(～シタ)を示している。

- (15) いかなる世にか、「紅葉せむ世や」と言ひたるものもし。 (枕 38 段)  
(いったいどういう時なのか、「紅葉せむ世や」と歌にも詠まれているのも、頼もしいことだ)
- (16) 「さとにや侍らむ。かれ見はべらむ」と言ひたれば、「あなゆゆし。さらにさるものなし」と言はすれば、 (枕 8 段)  
(「そういうことなのでございましょうか。それを拝見いたしましょう」と言ったので、「まあ、恐ろしいこと。絶対にそんなものはいない」と言わせると)

これら(13)～(16)のタリは過去に言及したアスペクトを表したものであり、同じ動詞が上接したテアリのアスペクトがあくまでも現在(発話時)を中心としているのとは異なっている。このようにテアリはテアリ中のアリの存在により(発話時での)状態表示が強められ、その分タリとは微妙に異なった意味を表し、特に(8)の継続用法はアスペクチュアリティに関する振る舞いそのものがタリとは異なっていると考えられる。

#### 4.2. 限界性のある他動詞十テアリ(類型Ⅲにあたるもの)

ここでは限界性のある他動詞を動作客体(=動作対象)との関わりから3つに分ける。

- ① 限界性のある他動詞のうち、動作客体はその動作により位置変化、状態変化等の変化を被る動詞：以下のものである(計12例)。

「隠す」「据う」「乗す」「もてなす」（2例）\*10「結びあはず」「鎖す」「見捨つ」「籠む」「とりまず」「（とりまぜなど）す」「重ね」

- ② 限界性のある他動詞のうち、その動作によりなんらかの「（非情・有情の）もの」が生産・出現される動詞：以下のものである（計4例）。

「書きしるす」「書く」「迎へ取る」「尋ね取る」

- ③ 限界性のある他動詞のうち、動作が再帰的で動作客体に結果が残存しない動詞：以下のものである（計3例）。

「（耳を）ふたぐ」「（罪）かくす」「（むかへ火）つくる\*11」

次に例文を示すが、この節の①②のグループに属するテアリ文は、意味の上で、3節までに述べてきたテアリ文にはみられない、動作主体の後退・背景化などによる異なりが生ずる場合もあるので、その異なりを十分に検証するために、これらのグループの例文は全て示すこととする。

#### 4.2.1. 限界性のある他動詞のうち、動作客体がその動作により位置変化、状態変化等を被る動詞

①のグループの例文をあげる。最初に位置変化後の場所を示す語句が含まれている例を挙げる。

- (17) しばし、ここに隠してあらん、と思ふも、見ずはさうざうしかるべくあはれにおほえたまへば、（源 東屋）

（（女君（浮舟）を）しばらくここに隠しておこう、と思うにつけても、逢わないでいるのだったら物足りなく寂しいにちがいないし、いとおしく思わずにはいられないので）

- (18) 家ひろく清げにて、わが親族はさらなり、うち語らひなどする人も、宮仕へ人をかたがたにすゑてこそあらせまほしけれ。（枕 284段）

（家は広く見た目にきれいであって、自分の親族はいうまでもなく、親しくつきあったりする友達として、宮仕えしている人を部屋部屋に置いておきたいものだ）

\*10 この「もてなす」は「世話をする（面倒をみる）」の意である。

\*11 「（むかへ火）つくる」は「腹を立てる」の意味である。

(19) また、御迎への出車ども十二、本所の人々乗せてなんありける。

(源 宿木)

(そのうえお迎えの出車十二両に本邸の女房たちを乗せて来たのだった)

(17)～(19)のテアリ文は、「～テ」で示されている動作を行う動作主体の行為により、位置変化という変化を被った動作客体(人、物など)の状態を示している。例えば(17)では動作主体の「隠す」という行為により動作客体(女君)の置かれている場所(=位置)が変化し、その結果動作客体が「ここ」に移ることになる。(18)(19)でも同じような位置変化が行われ、動作客体(官仕へ人、本所の人々)が特定の場所(部屋部屋、出車)に落ち着くことになる。このような位置移動という変化後の動作客体の結果状態を述べているものが(17)～(19)のテアリ文である。これに対し動詞類型①②④の動作動詞を述語にとるテアリ文はあくまで有情の動作主体の動作・変化の結果状態、動きの継続など、動作の主体について述べたものであり\*12、(17)～(19)のテアリ文と類型①②④の動詞をとるテアリ文とは、明らかに「～テアリ」が述べている対象が異なっている。動詞類型③②④をとるテアリ文のテアリは「動作主体について述べているテアリ」、(17)～(19)のそれは「動作客体について述べているテアリ」であるといえよう\*13。

次に、(17)～(19)における「動作客体について述べているテアリ」の文は実際どのような意味を表すのかをみていく。(17)ではテアリに意志の助動詞「む」が付くことにより、「(女君)をここに隠しておこう」と言うような動作による結果の意志的維持の意味が生ずる。(18)も使役の助動詞「す」が付くことによりこれと同様の意味となる。これに対し(19)は「一を～してある」という動作客体の客観的な結果状態を表す。さらに文の意味解釈上の動作主体についてみていくと、(17)(18)は意味が動作による変化結果の意志的維持をめざすものなので動作主体が存在する必要があるが、(19)は動作主体が特定できず背景化しており、同じ変化結果を表わすにしても、こちらは意味解釈上動作主体の存在を必要としていない。ここでは、仮に(17)(18)のような文を「動作主体必要文」、(19)のような文を「動作主体不必要文」と呼ぶことにする。動詞類型①②④をとるテアリ文のテアリは「動作主体について述べているテアリ」であり、これらのテアリ文も「動作主体必要文」であるとい

\*12 類型①の建築物の設置状態の主語は慣用的擬人法として、有情物として扱った。

\*13 「動作主体・客体」の用語については工藤 2004 を参考にした。

える<sup>\*14</sup>。しかし、「動作客体について述べているテアリ」文の場合は、ここで述べたように「動作主体必要文」と「動作主体不必要文」が混在していることになる。動作客体についてみれば、(17)(18)は特定の人であるのに対し、(19)は不特定の人（本所の人々）という違いがある。

次の例も動作客体は特定の人であり、動作主体の行為により動作客体にあたる対象人物が（場所は示されていないが）位置変化を含むなんらかの変化を被ることを意味している。

- (20) かつは、この人をいかにもてなしてあらせむとすらん、ただ今、ものものしげにてかの宮に迎へ据ゑんも音聞き便なかるべし。・ ・ ・ （源 東屋）  
 （それにしても、「自分はこの人をどう扱っていけばよいのだろう。今すくにも、いかにも重々しく我邸に迎え住まわせるのも、世間体がわるからう。・ ・ ・」）
- (21) 夜をだに明かしたまはぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせたてまつらばや、など思ひて、 （源 総角）  
 （夜を明かすことさえできかねているとはさぞお辛いことだろう、なんとかお幸せになるようにしてあげたい、などとお思いになって）

これらのテアリ文のテアリは「動作客体について述べているテアリ」であり、意味は使役の助動詞「す」に意志の助動詞「む」や願望の助詞「ばや」が付き、動作結果の意志的維持（「～を～しておく」）となるので「動作主体必要文」である<sup>\*15</sup>。

次に動作客体が人でない非情物である場合の例を示す。最初に意味が「～を～し

\*14 平安期の仮名散文では主語が文中に形態上表記されていない場合が多い。しかしながら実際には文中の敬讓語や文脈により主語が特定される場合がほとんどである。このことは限界性他動詞+テアリの文にもテアリ+（補）助動詞という形で数例みられる。

\*15 前述の(17)および(20)(21)および後述する(31)(32)はいずれも動作対象が人であり、かつテアリのアリに使役の助動詞「す」が接続している。この人を客体とした「～てあらず」の形は他の種類の動詞にもみられる。次例は状態変化（自）動詞にテアリが下接したものである。

まことにすこしも世づきてあらせむと思はむ女子持たれば、 （源 若菜上）  
 （本当に少しでも世間並みの暮らしをさせたいと思うような娘をもつ親としては）

ておく」という意志のものになる例をあげる。

- (22) さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、「答へきこえて、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。(源 末摘花)  
(それでもさすがに人の言うことは強く拒むことのおできにならぬご性分なので、「ご返事申さないで、ただ聞いていなさいというのでしたら、格子などは鎖じておいてくださいな」とおっしゃる。)
- (23) 「・・異事は知らず、世にあらんかぎりは、何ごとをか見捨ててはあらんと思ふに、心憂く。・・」(栄 卷10)  
(ほかのことはともかく、このわたしがこうして健在でいる限りは、どんなことでも見捨てておくようなことはすまいと思っているのに、情けないことだ)
- (24) やうやう世の物語聞こえたまふに、いと籠めてしもあらじと思して、「昔より・・」とて、今ぞ泣きたまふ。(源 蜻蛉)  
(源氏の)大將はだんだんと世間話を申しあげていらしゃるうちに、(想っていることを) そういつまでも秘密にしておくこともあるまいと思ひなつて、「昔から・・」と言って、今はじめてお泣きになる)
- (25) さま容貌のなのめにとりまぜてもありぬべくは、いとうしも、何かは苦しきまでもて悩まほし、一中略一 あはれにかたじけなく生ひ出でたまへば、あたらしく心苦しきものに思へり。(源 東屋)  
(この姫君の姿顔立ちが並々で他の娘らといっしょにしておいてもよいのなら、まったく何もこれほどまでも、(この姫君の) 扱いに心を悩ますことがあろうか、一中略一 もったいないほど気高く成長されたのであるから、こうした境遇に置くのも残念で痛々しいと(母君)は思っている)

これら例文中のテアリも「動作客体について述べているテアリ」であり、意味は助動詞「む」や許可を表す「ぬべし」などがテアリに下接して動作結果の意志的維持(「-を~しておく」)を表しているので、「動作主体必要文」である。

次に同じく動作客体が非情物である「-を~してある」という動作結果の状態を示す例をあげる。

- (26) かの須磨のころほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるはことに結ひあはせてぞありける。みづからしおきたまひけることな

れど、（源 幻）

（院（源氏）が須磨に退居していたころ、あちこちの女君達がおさしあげになったものの中に、紫の上の御筆跡は、特にまとめて結わえてあるのだった。院ご自身がそうしておおきになったのだが、・・・）

(27) ただ、いとすくよかに言<sup>い</sup>少な<sup>く</sup>にてなほなほしきなどぞ、わざともなけれど、物にとりませなどしてもあるを、（源 宿木）

（ただほんとにきまじめに、文言の少ないありふれた手紙が、特に大切にまってもいないのに、何かといっしょにしてあったりなどするのを）

(28) 九月には、やがて野宮に移ろひたまふべければ、二度の御祓のいそぎとり重ねてあるべきに、ただあやしうほけほけしうて、つくづくと臥しなやみたまふを、（源 葵）

（九月には、すぐ野宮にお移りになるご予約なので、二度目の御祓の準備が引き続いてあるはずなのに、（母御息所が）どうしてかただ魂がぬけたようになって、・・・）

これらのテアリ文のテアリも「動作客体について述べているテアリ」であるが、動作主体は文表面からは後退（(26) (27)）、背景化（28）しており、「動作主体不必要文」である。意味は客観的な結果状態（「～を～してある」）を示す。しかしながら、テアリとタリでは、同じ動作客体の結果状態を表すにしても、同種の動詞を上接した「～タリ」が単なる結果状態、完成を表すのに対し、「～テアリ」は「～して（そのまま）ある/いる（留まる）」という、ある程度の時間的幅の状態の持続を強調して表す<sup>\*16</sup>。このことは、以下で述べる結果状態を表すテアリ文にも現われている。

#### 4.2.2. 限界性のある他動詞のうち、その動作によりなんらか「(非情・有情のもの)」が出現・生産される動詞

②のグループの例文を示す。

はじめに動作客体が非情物である場合の例を示す。

---

\*16 状態持続の強調により、例えば(26)の「結ひあはせて（ぞ）あり」は「結いあわせてある（＝保存されている）」の意味になる。

- (29) 「さうざうしきに、今日の有様すこし書きしるしてあらんなん、よかるべき」と、御気色ありければ、権大夫なん、その日の歌の序題書きしるしたまひける。 (栄 卷31)  
(関白殿は)「少し物足りないので、今日の有様を少々書き記しておくのがよいであろう」とご内意がおありだったので、権大夫が当日の和歌の序と題とを書き記されたのだった)
- (30) 文字に書いてあるやうあらめど心得ぬもの、妙塩。禊。・・ (枕 逸4)  
(文字に書いてある理由はあるのだろうけれど、どうも納得できないもの、妙塩。禊。・・)

(29)(30)のテアリ文のテアリはどちらも「動作客体について述べているテアリ」である。意味は(29)が意志の助動詞「む」が付いた結果の意志的維持(「ーを～しておく」)であり、「動作主体必要文」であるが、(30)は動作結果の状態(「ーを～してある」)のみに言及しており「動作主体不必要文」である。

次に動作の対象が特定の人である場合の例を示す。

- (31) ここにも、一中略一 をさをさ劣らぬ人も、類にふれて迎へ取りてあらすれど、こよなく衰へたる宮仕人などの・・ (源 滯標)  
(ここ明石のほうでも、一中略一 (この乳母に) さしてひけをとらぬ身分の人も、縁故をたよって呼び迎えてはいるが、それらはすっかり落ちぶれはてた宮仕人などで・・)
- (32) この人は・・中略・・母君も亡せたまひて後、かの殿には疎くなり、この宮には尋ね取りてあらせたまふなりけり。 (源 椎本)  
(この人は・・中略・・母君も亡けられた後は、大納言家とは疎遠になり、この宮家でこの人を引き取ってお住ませなされていた)

これらテアリ文のテアリも「動作客体について述べているテアリ」である。(31)(32)は、意味は使役の助動詞「す」が付くことにより、共に動作結果の意志的維持(「ーを～しておく」)を表す。動作主体に関しては、(個人ではないが)特定できる人物をもつ「動作主体必要文」である。

4.2.3. 限界性のある他動詞のうち、動作が再帰的で動作客体に結果が残存しない動詞

以下の動詞が③のグループに含まれる。

「(耳を) ふたぐ」「(罪) かくす」「(むかへ火) つくる<sup>\*17</sup>」

このうち「(耳を) ふたぐ」の例文を示す。

- (33) 「いみじう、かたはらいたき事はせさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その布一つ取らせて、とくやりてよ」 (枕 83段)  
 (ひどくまあ、そばで聞いていてもきまりが悪いようなことをどうしてさせたのか。とても聞いていられなくて、耳をふさいでいたのです。その着物一つを与えて、早く向こうへ行かせなさい)

③のグループに含まれる動詞(「(耳を) ふたぐ」「(罪) かくす」「(むかへ火) つくる」)は動詞だけを自・他で分ければ他動詞ではあるが、内容は自動詞的なものである。例えば(33)の「(耳を) ふたぎてあり」は再帰的動作にテアリが接続して「～して、(そのまま) いる」という動作主体の状態持続を表し、他の2つの動詞のテアリ文も同様の意味を表している。このグループは①②と異なり動作主体の状態を表し、この点では限界性他動詞+テアリという形をとっているが、内容的には動詞の種類①②④をとるテアリ文のテアリと同じものである。ゆえにこれらのテアリは「動作主体について述べているテアリ」であり、文は「動作主体必要文」である。

4.3. 限界性のある他動詞+テアリのまとめ

4. 2では限界性のある他動詞+テアリという形を扱ったが、この形に含まれる3つのグループのうち、③のグループのテアリが「動作主体について述べているテアリ」であるのに対し、①②のグループのテアリは動作客体にあたる人・物などの状態を表す「動作客体について述べているテアリ」である。後者の意味は2つに分かれ、1つは「～を～しておく」という動作結果の意志的維持であり(11例)、動作客体は非情物(5例)か特定の人(6例)に限られている。他の1つは「～を～してある」という動作結果の状態を示すものであり(5例)、動作客体は非情物(4

\*17 「(むかへ火) つくる」は「腹を立てる」の意味である。



例) か不特定の人(1例=本所の人々)である。このことから、これら2つのグループは扱う動作客体に異なる傾向をもつようである。また、これらグループのテアリ文は動作客体について述べた文なので、動作主体は一見すると必要ないかのようと思われるが、実際には、意味解釈上動作主体の存在が必要なものと不必要なものがある(意志的維持の文はすべて動作主体の存在を必要とする)。次に比較のため同じように動作の客体の状態を表すタリについて述べる。

## 5. 動作客体について述べているタリ

本稿で示した「動作客体について述べているテアリ」に対応するタリ、つまり「動作客体について述べているタリ」の例文を2例あげる\*18。

- (34) 御車入るべき門は鎖したりければ、人をして惟光召させて、待たせたまひけるほどに、(源 夕顔)  
(お車を引き入れられる門は錠をおろしてあったので、従者に命じて惟光をお呼びになり、お待ちになっていらっしやる間)
- (35) ほのほのと物見ゆるほどに下りたまひぬめり。かりそめなれどもきよげにしつらひたり。(源 同)  
(ほんやりと物の見えるところに、車からお降りになったようである。にわかずくりの御座所ではあるけれど、ござっぱりととのえられてある)

(34)の動詞「鎖す」は4. 2で示した他動詞分類で④の①に属するものであり、同じく(35)の「しつらふ」は④の②に属するものであり、ともに「～タリ」で動作客体について述べている。動作主体についていえば、(34)(35)は動作主体が背景化した「動作主体不必要文」であり、動作客体は非情物である。意味はともに動作の結果状態を表す。以上の2例でも明らかなようにタリにもテアリ同様の「動作客体について述べる」用法がある。しかしながらこれらのタリ文はいずれも単に(過去時に起こった)動作の(発話時での)結果状態を示し、テアリ文のようなある程度の

---

\*18 「動作の客体について述べているタリ」について、鈴木1999(p.82)が、また現代日本語方言における同様の「動作客体の状態表示」の用法を持つアスペクト助動詞の存在について工藤1995(p.262) 金水1995(p.177)が述べている。

（時間的）幅をもつ（過去時に起こった）動作の（発話時での）結果状態の持続という意味合いはない。また「動作の客体について述べているテアリ」にみられた「結果状態の意志的維持」の用法もタリには見当たらない。

## 6. 本稿のまとめ

以上1節から4節までテに上接する動詞の類型毎に、テアリ文の意味・機能をみてきた。以上述べてきたことをまとめてみると、まずテアリ文は動作・変化の結果・継続を表すといえる<sup>\*19</sup>。次に内容的には「動作主体について述べている」ものと、「動作客体について述べている」ものに分けられ<sup>\*20</sup>、また文の意味解釈の面からも主語の存在が必要なものと不必要のものに分けられる。これらのことを以下に図示する<sup>\*21</sup>。

図2 テアリ上接動詞と意味解釈の関係

動詞類型	結果表示		結果表示対象		動作主体の存在	
	動作	変化	動作主体	動作客体	必要	不必要
①	○		○		○	
②		○	○		○	
③		○	/			
④	○		○		○	
⑤の①	○			○	○	○
⑤の②	○			○	○	○
⑤の③	○		○		○	

\*19 但しテアリはタリと異なり動作の完成（～シタ）は表さない。

\*20 動詞類型③は主語に当たる人・物の状態変化について述べている。この人・物を変化の主体とすると類型④が上接するテアリは「変化主体について述べているテアリ」ということになり、テアリは大きく分けて「動作・変化主体について述べているテアリ」と「動作客体について述べているテアリ」の2つに分類できることになる。

\*21 動詞類型③の状態変化自動詞のテアリは「動作」ではなく「変化」の主体について述べている。そのため③の結果表示対象と動作主体の存在の欄に斜線を引いておいた。

この表からもわかるように、テアリ文はテに上接する動詞により、結果状態として表すものが、動作によるものか、変化によるものかという異なり、意味構造における結果表示対象が、動作主体であるか、動作客体であるかという異なり、さらには意味解釈上動作主体の存在が、必要か、不必要かという三つの面で異なりが生ずることがわかる。

次にテアリとタリとで異なる点をあげる。

テアリ文の表す原則的意味は動作結果の場合には「(動作)して、その(状態)ままいる/ある(留まる)」、変化結果の場合には「(変化)して、その(状態)ままいる/ある(留まる)」のような、動作・変化終了後における状態の、ある程度の時間的幅をもつ持続を表す。タリは同じ動作・変化後の状態を表すにしてもこのような持続の意味はなく、この点でテアリとは異なっていると見える。また継続の用法ではテアリにはタリにはみられない動作継続(=進行)の読みがある。さらにテに限界性のある他動詞が上接する場合、テアリにはタリとは異なり、「ーを～しておく」という、結果状態の意志的維持を示す場合がある。

#### 参考文献

- 奥田靖雄 1994 「動詞の終止形(その3)」『教育国語』2・13号 ひび書房
- 春日和男 1953 「助動詞「タリ」の形成について」『萬葉』第7号 萬葉学会
- 1968 『存在詞に関する研究』風間書房
- 神永正史 2001 「ノデ、カラ節のル形とタ形について」『日本語と日本文学』32号 筑波大学国語国文学会
- 神永正史 2006 「平安中期のテアリ ータリとの比較からー」『筑波日本語研究』第11号 筑波大学日本語研究室
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト ー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房
- 2004 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 ー標準語研究を超えてー』ひつじ書房
- 金水 敏 1982 「人を主語とする存在表現 ー天草版平家物語を中心にー」『国語と国文学』第59巻12号 東京大学
- 1995 「いわゆる進行態について」『築島裕博士古希記念国語論文集』汲古書店
- 2006.a 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房

- 2006.b 「日本語アスペクトの歴史的研究」『日本語文法』6巻2号 くろしお出版
- 此島正年 1973 『国語助動詞の研究』桜楓社
- 鈴木 泰 1996 「メノマエ性と視点(Ⅲ) -古代日本語の通達動詞の evidentiality-」『日本語の諸問題-高橋太郎先生古希記念論文集』ひつじ書房
- 1999 『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト -源氏物語の分析-』ひつじ書房
- 2004 「第6章 テンス・アスペクトを文法的にみる」『朝倉日本語講座6』朝倉書店
- 竹沢幸一 2001 「コンピュータ動詞アルの二面的語彙特性とその構文的具現」『意味と形のインターフェイス(下)』中右実教授還暦記念論文編集委員会(編) くろしお出版
- 原沢伊都夫 2005 「テアルの意味分析 -意図性の観点から-」『日本語文法』5巻1号
- 福沢将樹 1997 「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティ」『国語学』191集
- 益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版
- 柳田征司 1987 「近代語「テアル」」『愛媛国文と教育』19号 愛媛大学
- 1991 『室町時代語資料による基本語彙史の研究』武蔵野書院
- 山口堯二 2003 『助動詞史を探る』和泉書院
- 山下和弘 1989 「「タリ」と「テアリ」」『語学研究』第66・67号 九州大学国語国文学会
- 1996 「中世以後のテイルとテアル」『国語国文』第74号 京都大学
- 吉川武時 1976 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- Ritter, Elizabeth and Sara Thomas Rosen 1998. Delimiting Events in Syntax. In M. Butt and W. Geuder (eds.) *The Projection of Arguments*. CSLI Publications.
- Tenny, Carol. 1994. *Aspectual roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

<主な引用・資料文献>

『新編日本古典文学全集 源氏物語』(1996 安部秋生他3名訳・注 小学館 底本伝

定家筆本、伝明融筆臨模本、大島本、青表紙諸本)

『新日本古典文学大系 源氏物語』(1993 柳井滋他 5 名校注 岩波書店 底本飛鳥井雅康等筆本)

『源氏物語大成』(1953 池田亀鑑 中央公論社)

『新編日本古典文学全集 枕草子』(1997 松尾聡他 1 名訳・注 小学館 底本陽明文庫蔵本、弥富本)

『新日本古典文学大系 枕草子』(1991 渡辺実校注 岩波書店 底本陽明文庫蔵本 内閣文庫蔵本)

『新編日本古典文学全集 栄花物語』(1995 山中裕他 3 名校注・訳 底本梅沢本)

『日本古典文学大系 栄花物語』(1976 松村博司 山中裕 校注 岩波書店 底本梅沢本)

かみなが せいし／人文社会科学研究科  
(2007年10月30日 受理)